

## カリキュラムマネジメントの理論に関する先行研究 の文献解題 : F.W.Englishのカリキュラムマネジメ ント理論とM. SkilbekのSBCD理論より

田村, 知子  
九州大学大学院教育経営学研究室 : 博士課程後期在学

<https://doi.org/10.15017/793>

---

出版情報 : 教育経営学研究紀要. 6, pp.95-103, 2003-01-31. 九州大学大学院人間環境学府(教育学部門)  
教育経営学研究室  
バージョン :  
権利関係 :

## 【資料紹介】

# カリキュラムマネジメントの理論に関する先行研究の文献解題

## —F. W. English のカリキュラムマネジメント理論と M. Skilbeck の SBCD 理論より—

田村 知子

### — 目 次 —

はじめに

#### I. イングリッシュのカリキュラムマネジメント理論カリキュラムとマネジメント

1. カリキュラムマネジメント
2. カリキュラムの評価 assessment
3. 学習成果の評価 audit
4. まとめ

#### II. スキルベックの SBCD 理論

1. 学校とカリキュラムデザイン
2. 学校のカリキュラムのためのデザイン

#### III. まとめ

### はじめに

「総合的な学習の時間」導入を核とし、教育課程の大綱化・弾力化および学校の自主性・自律性を1セットにした今回の教育改革においては、「特色ある学校づくり」を目指して各学校独自の創意工夫あるカリキュラム開発及びそのマネジメントを行うことが可能になったと同時に強く求められている。そこで、学校を基盤としたカリキュラム開発およびマネジメントについての理論的枠組みを構築し、日本の実践を分析していくための基礎的段階として、学校におけるカリキュラム開発において日本より先行してきたアメリカにおけるカリキュラムマネジメントの理論的枠組みをつかんでおく必要がある。また、OECD/CERI 以来国際的な研究対象となった SBCD (School Based Curriculum Development) 理論は、カリキュラムを各学校で開発することの重要性を指摘してきた。以上の理由から各学校レベルの開発に焦点をあてたカリキュラムマネジメントに関する以下の文献の解題を試みる。

#### 解題対象文献

Fenwick W. English, *Improving Curriculum Management in*

*the Schools*, Council for Basic Education, 1980 (全項)

Malcom Skilbeck, *School-Based Curriculum Development*, Harper & Row, Publishers, pp1-46, 1984

#### I. イングリッシュのカリキュラムマネジメント理論

##### 1. カリキュラムとマネジメント

本論文においてイングリッシュは、カリキュラムを次のように定義している。

「組織化された学校を維持する接着剤である」「学校内で頻発する状況への対応パターンを決める決定の混合物である」「一連の目標を、正当な教育的権威が達成するのを確実にする方法のひとつである」「マネジメントの道具である」「具体的な目標を達成するための手段である」。

従って、カリキュラムはマネジメントの道具・手段であり、書かれたカリキュラムは「マネジメント文書」としてとらえることができる。この「文書」に記載されるべき内容について、イングリッシュは、まず目標について、①目標は具体的であるべきである、②目標は、「生徒の学習・達成（目的）」であり、教師の行為（手段）では

ないので、手段を目標に置き換えてしまわないように、適切に表現する必要がある、と指摘している。目標が具体的かつ適切に描かれることによって、カリキュラムを評価する視点が与えられ、ひいてはカリキュラムマネジメントの成功の決定的要因となる。

次に、カリキュラムは「何を教え、何を強調し、どのように連続させるのか」についての決定を反映して記載されるものであるが、その「決定」のレベルは、次の二段階から成る。

①第1レベル：州議会・州教育委員会レベル

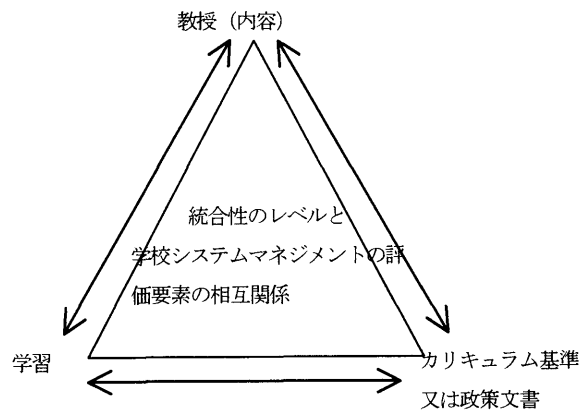
一般的目標の声明が行われる。

②第2レベル：地方の教育委員会レベル

具体的な目標と、明確な優先順位付けがなされた内容が、学校の専門家（教師）や市民にむけて示されるので、実際の授業に直接的に影響する。

イングリッシュは、第2のレベルにおける目標と優先順位の提示が「具体的」で「明確であることの重要性を指摘している。なぜなら、もし、それが曖昧で多義的であるなら、「教師が、自らの判断による優先順位の方を採用することに正当化してしまう」「学校が、望まないプログラムに従事してしまう」「市民が学校を批判する基盤をもてない」といった「よいマネジメントを不可能にする」結果を招いてしまうからである。逆に、よく定義された目標とそのものズバリの優先順位を示すことが、アカウ

図1



では、標準テストによらない評価とはどのようなものか。カリキュラムの評価 assessment における一つの指標は「カリキュラムの統合性 congruence」である。それは図1にみるような、三つの要素「カリキュラム基準または政策文書」「教授 (内容)」「学習」それぞれの間の「統合性」があるかどうか、ということである。言い換えるとこの三要素間のギャップを小さくし、それぞれをコーディネートされたシステムとして統合することをめざす。それができている場合、「品質管理 quality control」の面で、よくカリキュラムマネジメントが行われている、ということができる。

ンタビリティである。

さらに、カリキュラムの連続順の重要性も指摘している。特に数学のように、以前修得したことを基盤にしてスキルや知識を獲得する場合は理性的な連続性が必要であるし、生徒の学習についての体系的なデータ収集のためにも必要である。

このように、カリキュラムは、内容や強調点・学ぶ順序を決定することによって、マネジメント機能を果たすのである。

## 2. カリキュラムの評価 assessment

第2章では、カリキュラムの評価 assessment の視点と方法が論じられている。

まず、「標準テストがカリキュラムを定義する」実態の問題点が指摘されている。現実問題として、テスト結果は教師による教室の実践と結びつけて利用されることはほとんどない。多くの場合、標準テストの目標は、カリキュラムのそれよりも限定的であり、結果的に標準テストがカリキュラムを定義・制限・コントロールする結果となっている。本来、「標準テストは、生徒がカリキュラムの目標を達成したかどうかを評価するために使用すべき」ものであり、その機能を果たすためには、「目標」「教授」「テスト」の三要素を学区が調整する能力を有する必要がある、とイングリッシュは述べている。

では、どのようにすれば三要素の相即性を図ることができるのか。それは、学校が「何を達成したいのか」「どのように行動するのか」「どうやって調整 adjustment するか」を知ることである。学区が、更なる資源を投入すること無く、絶えずこれらのことを行うことができれば、より生産的になりうる。このような品質管理を行うために、学区・学校・教師がコントロールできる変数（手段）こそが、「教授内容」「教授時間」「教授の順序」、すなわちカリキュラムなのである。

このような「統合性」が欠如した例として、イングリッシュは仮想の高校の例を挙げて説明している。その高

校では、例えば歴史については、学区の目標との間の「相即性match」はわずか16%である。「相即性」のみられない84%があることを知ることで、さまざまな疑問が引き起こされ、我々は「説明されていない、カリキュラムの断片を確認する」ことができる。

カリキュラム文書は、上述の三要素の構成物が記述さ

れ、三者の相互関係が説明されているべきである。この文書を検討 review することによって、「カリキュラムの相即性」を分析することが出来る。イングリッシュは、その際の基準を開発し、ランキングスケールにした。(図2)

図2 カリキュラム文書内の、カリキュラムの品質管理を測定するためのサンプルフォーム

ランキングスケール

3 = 特別に定義されている

2 = 一般的に定義されている

1 = あいまいに定義されている、または、単に暗示されている

教科	学校				
学年	ランキング				
基準	3	2	1	0	点数
1. 目標の明快さと妥当性					
— 明確で測定可能な、生徒に基づいた目標					
— 妥当性を確立するために取られた手続き					
2. カリキュラムと評価の調和					
— テストがそれぞれの目標に調和している。					
— 評価されていないカリキュラムの部分が峻別されている					
— 記述された評価方法					
3. 基礎的知識・スキル・態度の学年による定義					
— 学年によってリスト化された、必須の知識、スキル、態度					
4. 主な教授用具の記述					
— 教科書使用のためにリスト化された基準					
— 目標毎の、教科書とカリキュラムの間の調和					
5. 教室での使用への適応性					
— 教え方の、特別の例示					
— 生徒の反応の解釈					

3. 学習成果の評価 audit

さて、イングリッシュの理論におけるカリキュラムマネジメントの単位は「学区」である。本章では、学区のカリキュラムの品質管理を評価 assess する有効な方法論として、「学習成果の評価」EPA (Educational Performance Audit) が提唱されている。EPA は①学習目標は、学校の適切な資源配分を導くか、②学区が教育的プログラムを選定・デザインする方法と基準、③既存のプログラムが、教育的要求に最大の応答をしているか、④生徒の学習成果を評価する方法とその適切さ、⑤教授 - 学習における弱点を修正するための方法、⑥学区が住民への責任を果たす方法、といったことをおおよそ明らかにすることができる。

EPA は、権威と客観性と高潔さという三基準を満たした評価者 auditor によって行われる。方法は、ドキュメント分析および個人インタビュー、学校訪問という三つの情報源より得た情報を、次の五つの基準に照らし合わせて、カリキュラムの品質管理を評価する。

- ①学区が、資源・プログラム・人事についての管理を、自ら明らかに示すことができる。
- ②学区が、測定可能で妥当な、生徒の学習目標を設定している。
- ③学区が、プログラムの開発・実施・管理について説明する文書を有している。
- ④学区が、効果のないプログラムの修正・廃止のために、評価を自らデザインし実施している。

⑤学区が、生産性を改善している。

「生産性」は、「コスト」とカリキュラムの連関を調べるのが大切である。コストには、固定 fixed、可変 variable、混合 mixed の三つがあり、これらは三つの変数（量、環境、行政決定）によって影響されている。これら一つ一つを、カリキュラム文書内に見出し分析し、カリキュラムとの関連（カリキュラムに起因するコスト）を見出すことで、カリキュラムの改善、ひいては生産性の改善を求めている。

EPAを採用するのは、教育委員会、行政官、コミュニティといった主体である。中でも市民 citizens は、所属コミュニティ内の学校教育に対して甚大な影響力をもつ。彼らが無知・無関心である場合は、彼らの影響力は予測できない。市民に学校経営の正しい知識や情報を与えるのが EPA である。そこでイングリッシュは、市民がとるべき態度について、五つ提案をしている。つまり、①教授の結果（量、タイプ、生徒の学習の進歩）を調査すること、②カリキュラムと教授の間の連結を探ること、③PR ではない、包み隠しのない報告を要求すること、④自らの興味を持続させること、⑤独立した評価 review を求めること、である。

このような市民による評価は、いくつかの障壁 barriers によって妨げられる可能性がある。イングリッシュは予測される障壁とその乗り越え方を以下の通り提示している。

- ①情報の山に埋もれる→文書の説明、要約を求めよ
- ②不平分子のレッテルを貼られることを恐れる→建設的な反応を促すような雰囲気をつくれ
- ③官僚による防衛→信頼を勝ち取れ
- ④迅速な解決を求めてしまう→甘くて簡単な解決を甘受せず、慎重であれ
- ⑤苛立ちと時間の制限→決定の延期を要求せよ

#### 4. まとめ

本論文でイングリッシュが議論したのは、カリキュラムマネジメントを評価し改善を促し成果をあげるための、具体的な分析視点・評価基準・評価手順である。

イングリッシュのカリキュラムマネジメント理論の特色は、以下の通りである。

- (1) 具体的に明確な目標（＝生徒の学習成果）を達成することが、カリキュラムマネジメントの目的であることを強調している。
- (2) カリキュラムをマネジメントの方法・手段とみなしている。
- (3) カリキュラムマネジメントの単位を「学区」におき、その主体的な関係者としての「市民」の役割を重視している。

(4) その市民が、カリキュラムを評価する具体的方法として EPA を提案している。

## II. スキルベックの SBCD 理論

スキルベックによるこの著書の目的は、各学校が、中央政府や地方教育当局、コミュニティなどとの関係性をもちながら、なお、主体的な存在としてカリキュラム開発において果たす役割を再定義することである。すなわち、School-Based Curriculum Development (以下 SBCD) とは何であるか、SBCD はどのように実行されるのかを明らかにすることである。これは従来の、学校を単なる政策の受け皿とみなす社会の考え方や、カリキュラムを教科・時間割等の組合せとみなしたり、専門家の領域とみなしたりして、自らカリキュラムの考察をおこなわなかった学校自体への問題意識から始まっている。SBCD を分析するカギは、国家政策といった外部影響要因の文脈において、学校内部におけるデザイン過程に着目することである。

### 1. 学校とカリキュラムデザイン

スキルベックはまず、SBCD を「生徒の学習について、生徒が所属する教育機関によってなされる計画、デザイン、実施、評価」と予備的に定義し、中でも「教育機関」に着目して学校の位置付けを明確にすることを試みている。その上で SBCD においては、①カリキュラムは学校にとって内的で有機的なものであり、外的押し付けではない、②学校は他の教育機関やグループ、団体とのネットワークを有している、とした。学校はカリキュラムの計画、デザイン、実施、評価を行う組織としての能力（組織、風土、経営等）をもつことが要求されるのである。

SBCD のための文脈 A context for school-based curriculum development

さて、ここで「学校」と「社会の構造（他の機関、権力）」との関係性を整理する。社会構造は学校のカリキュラムに影響を与えるし、学校はカリキュラムによって構造へ影響を与えることができる。SBCD はその前提のもと、学校と外部構造との相互関係の文脈でアプローチする（国家の教育システムの構造とプロセスに注目する）ことを提案するが、その理由は以下の通りである。

- ① 政策は州で決定され、地方（学区）に割り当てられる
- ② 州の教育管理による一般的概要や枠組みは、地方の決定に影響を与える
- ③ 国家レベルの予算が、カリキュラムの価値や目的につけられる
- ④ 「学校のイニシアティブ」も「外部の力」もそれぞれ単独には、必要とされる程度のシステム変化を達成す

ることができない

次に、説明原理として最も有名なのは1940年代に開発された「タイラーの原理」である。これは、①教育目標のデザイン、②目標を達成するために供給される経験、③経験の組織化、④アセスメントと評価という4つの段階から構成されたが、後にタイラー自身によって、「教師に明確な役割を与えること」「デザインは全て目標からという単純な直線化を避けること」「生徒のニーズを、アセスメントにより明確に位置付けること」という修正が加えられた。この修正は、学校に焦点化した方向への修正といえるものである。

さて、イギリスでは1960年代よりSBCDそれ自体が社会的・経済的な力を形成しながら、新しい国家的なイニシアティブ(national framework, national curriculum framework)を伴いつつ増加してきた。スキルベックはSBCDを①国家的イニシアティブの文脈及び②コアカリキュラムの文脈から再定義を試み、学校がカリキュラム計画全体において社会的・文化的変化に対しても注意を払う方法を提案しようとする(=社会的・文化的な“現実を変える”ためのカリキュラムイシューの分析をも行う)立場にある。

SBCDのための事例 The case for school-based curriculum development

次に議論されるのは、カリキュラム開発における「学校の役割」の原理である。「学校はカリキュラム開発における主要な機関のひとつである」と推定できるが、「より広い領域における学校の位置付け」「カリキュラム評価・開発の原理と手続き」「人事や専門的知識といった本質的な資源」といったことについて議論する必要があるのである。実際、イギリスではカリキュラムコントロールにおける学校や教師の役割というものは「信仰」されてきたのであるが、それらが疑問視されるようになってきている。つまりここで問題とするのは、「だれがカリキュラムをコントロールすべきか」という問いである。この点についての考え方の世界的・歴史的な変遷について、スキルベックは以下のように整理している。

- ①学校自身がカリキュラムを決定する。
- ②学校の中で、より大きな組織(地方・国家の教育的官僚や調査機関等)がカリキュラムを決定する。
- ③学校は、コミュニティグループや地方・国家の政府の嗜好や決定を、形にして表現する場所である。
- ④学校と近隣コミュニティとの、日常的な相互作用によってカリキュラムは決定される。(→大半が、学校教育を州が支配するという結果に終わった。18-9世紀欧米、20世紀発展途上国や革命社会において。)
- ⑤行動上の制限はあるが、教師はカリキュラムづくりの

摂政のようなものであるという伝統(または伝説)があった。(19世紀イングランド・ウェールズ)

- ⑥教師を飛び越えたカリキュラム開発の議論。(20世紀アメリカ)
- ⑦⑥に対するシュワブ J. J. Schwab の反論「どんな指令 command も、教室における個々の実践において、状況に応じて教師が修正することができる。」(教室における教師の決定の自律性)
- ⑧国家プロジェクトとして「耐教師性 teacher proof」カリキュラムを開発。(1950年代アメリカ)
- ⑨⑧への反発の動き。(教師による開発、プロジェクトを超えての学校による開発、協力的な学校と教師の緩やかなネットワークづくり)
- ⑩の動きをSBCDと見る動きと、逆に商業的な教科書の代替物とみなす動きの両方がある。

ところで、SBCDはカリキュラム開発の多様なスタイルや方法の中の一つである。学校がカリキュラムづくりにおいて主要な役割を果たすことが望まれてきたわけではなかった。SBCDの一般的誤解として、「重要なカリキュラム教材の生産の役割を、学校が要求している」というものが存在するが、学校は教材の卸売業者ではない。学校の課題の中心は、教育目標のマネジメントなのである。従って、学校を状況的に見る必要があり、また、カリキュラムにおける学校の活動は適切な文脈において理解される必要があるのである。

次に、SBCDについての主要な議論を確認するために、スキルベック自身が密接に関わったOECD/CERIで議論されたことの結論を、次のように紹介している。すなわち、OECDのメンバー国それぞれが多様な制度や状況をもっているのだが、最終的に、次のような結論に落ち着いた。

- ①カリキュラムづくりにおいて学校の自律性の増大を求める動きは、現代社会におけるより大きな動き(直接参加の意思決定、政策の民主化)の中の一つである。
- ②中央からカリキュラムがコントロールされることで、不満足や抵抗が生まれ、カリキュラムが提案する内容への無関心という結果が引き起こされてきた。
- ③学校は、動的な関係性をもつ人々から構成される、生きた有機体としての社会組織であり、環境との双方向で複雑な関係性をもち影響しあっている。この場合、カリキュラムは学校教育の中心的な構造的要素であり、学校は自己決定権と自己指揮権が必要である。
- ④カリキュラムの内容は、学習経験を構成している。カリキュラムの計画とデザインは、特定の組織における所与の生徒グループのために、学校がなし得る最高のことなのである。
- ⑤学校が、地域環境や多様な個人・集団に合わせてカリキュラムを適応させる役割を担い、自由と機会をもつ

て、柔軟なカリキュラムマネジメントを行うことができるときに、カリキュラムは最も効果的に実施される。

- ⑥カリキュラムの重要な側面（計画・デザイン・評価等）への直接参加こそが、教師に、自由で責任ある専門職人としての役割を果たすことを可能にする。
- ⑦各国で多くのカリキュラム開発センターが苦労したのちにわかったことだが、学校こそがカリキュラム開発にとって、より安定的で辛抱強い機関である。ある教育システム内ではいくつかの部門によって、組織全体のプロセスとしてのカリキュラム開発が行われるが、中でも学校に、最も価値あるカリキュラム開発の資源が集中しており、それは構造的に安定した耐久性をもっている。

以上のことが、議論の前提として、仮説的であり完全な評価を受けたわけではないが、検証されてきた。学校の役割を強化・支援するための挑戦ともいえるこの議論に、いくつか自由で資源をもつ学校が応えてきたが、まだまだ体系的な方法がとられてきたとはいえない。検証した調査もあるにはあるが、いまだそれらは比較的乏しいといわざるをえない。

## 困難と挑戦

SBCD の調査から、次の困難とその対応策が明らかになった。

- ①教師と他の関係者の能力とスキル  
常にある程度不完全である教師の能力やスキルは問題点であるが、教育システムと各学校の責任において、専門性の開発や研修を行う必要がある。
- ②教師の態度、価値、動機；多様な価値への方向付け  
教師の中にSBCDへの抵抗勢力があらわれるかもしれない。これに対して校長たちは、校内に支援的な風土を促進する責任がある。
- ③組織、マネジメント、資源  
階層的で保守的な意思決定の組織構造をもつ学校においては、カリキュラムの革新は簡単に妨げられる。時間や、明快で十分に吟味された展開といったものが、経営的に貢献してくれる。他に、時間やスタッフ、非教育的な要求からくるプレッシャーなどが妨げとなりうる。
- ④一般的戦略としてのSBCDの能率と効果  
SBCDのコストは正確に計算されたことはないが、効果的なのかどうかという政策的な懐疑論が存在し、これが妨害要因となっている。
- ⑤地方中心主義 localism、偏狭、保守主義  
学校は、限定的なテーマや教科プロジェクトにとどまらない、学校全体の評価（review, evaluation）や開発を計画・組織できるのかという問いが存在する。また、

カリキュラムづくりにおいて、国家的・システム全体のカリキュラム政策とプロセスとの関連において、学校がカリキュラムづくりという仕事をできるのかという問いもある。（学校は政策計画には不相当で、共通・コアカリキュラムが必要である、国家プログラムが必要である。）

これらの議論はますます増え続けているが、学校の手による自らの経験の良質な報告、実証性のある比較調査研究が、問題の明確化と分析の役に立つだろう。我々は、カリキュラムに対する学校の役割拡大を望むグループが存在することを主張すると共に、困難に対して構造的に応答する意志と能力を持っているか、ということ問うていかねばならない。より大きな動きの中で自らの役割を果たしうるように、各学校の能力を構築することが必要なのである。

## 2. 学校のカリキュラムのためのデザイン

本章では、カリキュラムそのものへ考察に立ち戻る。

### カリキュラム：その意味と定義の変遷

changing meaning and definitions

カリキュラムとは何か？という問いに対しては多くの辞書や専門書の中で説明がなされてきたが、ここで定義のリスト化や比較を超えて、興味深く挑戦的な問題へとはいっていく。つまり、「カリキュラム」という用語の4つの定義に注目していく。

- ①学校の指導のもとにおける、学習者の経験のすべて（Kearney and Cook 1960）
- ②学校目標の操作的記述（Foshay and Beilin 1969, p. 278）  
ある特殊な目標を生徒が学んで獲得するようにデザインされた活動プログラム（Hirst 1975a, p. 2）
- ③批判的吟味と効果的に実践に移行する可能性ある形で、ある教育的提案についての基本的原理や特徴と、コミュニケーションしようとする試み（Stenhouse 1975, p. 4）

これらの定義についての合意は未だみられていない。我々の関心は、①カリキュラムの計画・デザインにおいてとられる行為 action、②その行為に影響する条件づくり conditionにある。「カリキュラム」は一般的用語であり、より広範に使用されるようになって、定義はますます多様で手の込んだものになっている。ある場合は、①プログラムに従った定義、②教科シラバスと同一視した定義が行われるが、③「かくれた hidden」カリキュラム、「効果的な effective」カリキュラムという現代的な定義もある。「かくれた」カリキュラムは、カリキュラムに付与された社会的メッセージに注目した概念であり、「効果的」カリキュラムは生徒が何を学んだかに注目する概念である。これらは我々に、カリキュラム構造についての

観察・対話・評価 (assessment, evaluation) への道を開くものである。

「カリキュラム」という用語は長い歴史をもつが、体系的で科学的な教授を開発するなかで、一般に使用されるようになったのは19世紀後半からである。より最近では、教育的開発の戦略としてのカリキュラム改革の動きを見ることができる。

教義で文字通りの「カリキュラム」は「走るためのコース」を意味し、目標があること、コースを完走すること、基準や成果があることといった点で、レースと同質のものである。また、カリキュラムは「もの・こと thing」でもある。或いは教育的価値（目標）の集中的な表現である。最近までの一般的な考え方では、カリキュラムは、構造化された教科の時間割であり、シラバスの概要イコールカリキュラム、つまり知識・技術の伝達であるとみなされてきた。この後者の定義に対する挑戦でもある「進歩主義教育」は、19世紀後半から20世紀はじめに現れる。

#### 進歩主義教育からの挑戦 progressive challenge

進歩主義教育は①学校での自由と、生徒－教師間のよりリラックスした関係、②学習に置ける生徒の興味と活動への焦点化、③教科の境界よりも、テーマとトピックスによって組織された多様な内容、といったことがセットきた。そこでは一般的に、生徒の学習が①生徒同士の関係、②学習と学校外の生活を、統合することが強調される。それは教育実践の変更だけではなく、基本的な教育的構造や戦略、社会的文化的に再生産される学校教育の機能についての断固とした拒否を表明するものである。そのため教育に関するカギ概念の定義や内容が、進歩的教育の影響によって変化させられてきた。しかし、この動きは、抵抗というよりむしろ、思慮深く感度の高い創造的で教育的な努力といえる。

この動きは、「カリキュラム」という用語の再定義を求めるもので、「教師による伝達されるプログラム」から「学校の指導のもとでの、学習者の経験の総体」へと重要性がシフトした。これはJ. デューイやキルパトリック、ラッグなどの影響である。この定義は、①教育哲学の分野に多くの議論や反駁を引き起こし、②学校の役割を明らかに拡大し、「総合性」のあるカリキュラムの考え方を引き出し、③学習者の「経験」の文脈と状態、学校に影響する要因への注意を引き起こし、④カリキュラム、教授・学習、それらの組織化の間の関係性をオープンなものに変えた。

進歩的教育の定義は、1960年代初頭以降、強力に定着し、目立つ存在となった。教育学者は、子どもの学習経験に関心をおき、学校内外の影響要因に注目し、相互作用的で非直線的なパターンで考えるようになった。教育実践におけるキー概念（カリキュラムを含む）は、開放

性と緩やかさを持ち、学習環境における関係性とながりの探究を促進してきた。このようにJ. デューイの理論に従って、「明確に定義・計画された前提」から「経験の質とプロセス」へと強調がシフトされてきた。

カリキュラムについて、必ず言及されることがある。それは例外なく、教授と学習のために、計画があり、学習成果についての評価があるという点である。目標、教授－学習プロセス、成果の評価 assessment といったことについて長い間関心がおかれてきたが、経験の現実に関心を移していくと、これらの境界は不明瞭になってしまう恐れがある。つまり、我々は、カリキュラムをどのように定義して概念と用語を使用するかによって、カリキュラム開発問題に対する我々の観点と行為が左右されてしまうのである。

#### 検討、評価、開発 review, evaluation, development

検討、評価、開発の三つの用語は、カリキュラムの概念を変えようとする我々の議論にとって、役に立つものである。バラバラに取り扱われがちだった専門的な教科は、これらによって有効に連結させることができる。この3つの定義・概念の背景をみることで、カリキュラムにおける問題の解決、カリキュラム決定の採択、カリキュラム実施組織の設定ができる。ただし、「学校全体のカリキュラム」と「部分カリキュラム」とは区別しなければならない。この著書は、学校におけるカリキュラム開発行為に焦点化しているので、「学校全体のカリキュラム」の視角からの分析を行うが、「部分カリキュラム」についで焦点化してしまう可能性が危惧されている。そこで、検討、評価、開発という連続性に注目することの有効性を指摘している。

検討とは、実践のふりかえり・組織化された内容の吟味、観察されたことについてのレポートの吟味である。評価とは観察・報告されたものを目標や基準に照らして判断することである。開発とは検討・評価されたものを修正或いは変革することである。

しかし、学校教育の目的については多くの論争点がある。何が教えられるべきなのか、どのように組織化が行われるべきなのか、つまりカリキュラムデザインについて、異なった概念が歴史的に概観できる。ここでは次に述べる主要な四つの立場を概観することが試みられている。

#### ①知識の構造・形式としてのカリキュラム

カリキュラムを知識の塊・集大成とみなす立場について、進歩主義者からの批判を受けたが、現在でも存続し続けているものである。特に数学や科学は、この重要な理論や事実、学習の連続性、論証の方法や仮説検証の方法といったものと結びつきやすい。この立場を主導したのはヒルスト Hirst とブルーナー Bruner である。彼らは、



「明快な定義に基づいて知識を体系的に学習する必要」「認知的な目的及び知識の構造によるカリキュラムの定義」「知識の論理的構造と学習の心理的プロセスの分離と、特に前者の優先」といったことを論じ、カリキュラムは認知力を促進するための計画・プログラムであるとして、その構造的な視点を発展させた。カリキュラムは単なる「指導された経験」や「教科のセット」ではなく、「訓練の形態や領域・構造を通した秩序ある進歩」を強調する構造であり、形式である、とした。

## ②文化の海図・地図としてのカリキュラム

文化人類学的な考え方にヒントをえたもので、教育は人々に基準・価値・行為の仕方・信念体系といったものを手ほどきする手段であるにとらえる。ピーターズ Peters は「教育はイニシエーションである」と論じた。社会化されていない子どもや若者を、所属集団のやり方に導くための経験のセットがカリキュラムであると考えられる。従って、カリキュラムの構造と機能は、文化の意味、文化の基本的要素を理解することによって、理解できる。しかし、文化の基本的要素とは何かということについては、議論の分かれるところである。またロートン Lawton は、カリキュラムを「文化からの選択」と定義し、学校は文化についての海図・地図をもって、生徒に指導をする役割があると論じた。しかし文化の概念については幅があり、明確に定義しにくい、という困難さがつきまとう。その困難を乗り越える方法としては、①文化をカテゴライズする方法はたくさんあり、それらが何であるかを知ることには価値があり、その中から選択が行われうることを認めるということ、②カリキュラムは文化そのものではなく、教師と生徒と一緒に文化をマッピングするプロセスである（伝達すべき文化の概念を学校がつくる必要はない）にとらえることをスキルベックは提案している。

## ③学習活動のパターンとしてのカリキュラム

J. デューイの理論に基づくものであり、子どもの立場からカリキュラムを定義する。「イニシエーション」「誘導」「教え込み」に対抗し克服するために、「成長としての教育」（人と活動の相互関係に基づく教授、学習者と世界の相互交流としてのカリキュラム、行為と省察と実験の相互作用としての経験）を主張するものである。デューイに基づき、イギリスの Hadow レポートは、「カリキュラムは、獲得すべき知識ではなく、活動と経験の意味合いで考えられるべきである。カリキュラムの目的は、子どもの中に人間としての基礎的な力を育て、市民生活への基本的な興味を目覚めさせることである。」と報告し、カリキュラム分析の出発点を子どもにおくだけでなく、他者との関係における子どもの経験にカリキュラムを見出そうとした。この視角においては、学校は子どもに正しい環境を提供し、子どもが自分らしくあることを許し、

子どもに適切なペースで成長をさせようとし、仕事と遊びを補足的なものとみなす。この立場に対して、スキルベックは「知識の構造やカリキュラムの領域が念頭でない」点を批判している。

## ④学習方法 technology としてのカリキュラム

カリキュラムは「技術そのもの」であるとみなす概念である。つまり、カリキュラムは問題解決のツールであり、学習課題を構造化する方法であり、社会的関係や状況を組織化する方法であり、行為の原理と実践のテクニックである。例えばタイラー理論は、カリキュラムのプロセスモデルである。一つ一つのステップと、それぞれの段階における課題、その相互関係を明らかにしている。（Taba などによって応用されてきた。）これは、カリキュラムを技術的な装置・機械とみなすもので、伝達や経験を副次的なものとみている。そこにおけるカリキュラムの問題のポイントは、①正しいシステムをつくること、②それを実行すること、③操作方法を学ぶこと、である。従って、これは機械的なアプローチであるといえる。このような「プロセスモデル」は、「目標モデル」に取って代わられるという議論もあるが、スキルベックは「プロセス」と「目標」を対立するオルターナティブとはとらえていない。両者はダイナミックな関係性をもつ組合せであるにとらえ、「カリキュラムを移動可能な流れ、ダイナミックなパターンとして」成立させるようなカリキュラム概念の必要性を論じている。

## III. まとめ

この二章は SBCD 理論の土台となる、「学校の役割」及び「カリキュラム概念」について、多様な議論の歴史的な変遷をふまえて、次のように整理および考察を行うことができるものと考えられる。

- (1) SBCD は、学校と社会構造の関係性（相互作用）に注目する。
- (2) SBCD の理論的前提として、「社会が学校の自律性を要求している」「カリキュラムは学校を構成する中心的要素である」「学校によるカリキュラムマネジメントがうまくいくとき、カリキュラムは最も効果的になる」といったことが OECD/CERI で確認された。
- (3) SBCD が直面する困難、つまり「教師などの能力」「教師の態度や動機」「組織、マネジメント、資源」「効率」「地方中心主義」に対応できる意思と能力を、各学校において構築しなければならない。
- (4) カリキュラムを「知識・技術の伝達」とする考え方は、進歩主義教育からの挑戦を受け、「学校の指導のもとの、学習者の経験」が重視されるようになった。
- (5) 検討、評価、開発という三つの概念に着目することで、カリキュラムにおける問題解決、カリキュラム決定の

採択、カリキュラム実施組織の設定を行うことができる。

(6)カリキュラムのとらえかたは、「知識の構造・形式」「文化の海図・地図」「学習活動のパターン」「学習方法」等、多様である。

(1)～(6)について総括すれば結局、カリキュラムマネジメントの全体構造を明確にした一層の理論的、実証的研究が必要なことを改めて示唆しているものであることをつかむ必要がある。例えば(1)(2)からは学校の自律性を前提にした、各学校(単位学校)のカリキュラム開発(マネジメント)こそが必要なことが示唆された。(3)については、学校のウチの間とウチとソト(地域・行政)における教師をはじめとした関係者の協働の力量といったマネジメント能力が、(5)についてはまさにP-D-Sというカリキュラムのマネジメントサイクルが、また(4)と(5)については教科(知識・技能)の学問性中心のカリキュラムと共に子どもの興味・関心など経験に焦点をあてた経験カリキュラム(日本的にいえば総合的な学習)の必要性と共に、別に(6)についてはカリキュラムとインストラクション(学習過程や方法)とをむすびつけて研究・実践することの必要性が示唆されている。上記のような視点からここに日本でも改めて各学校でのカリキュラムマネジメントを開発し、検証していく必要性が今次教育改革によって、急務な課題になったと考えられる。この点で二つのカリキュラムマネジメントの理論枠の設定には示唆される点が多い。